

聾学校の授業の今とこれから – 多様な変化に対応した授業の在り方をさぐる –

【論点】

在籍児やコミュニケーション手段の多様化など、多くの変化のもとにある聾学校（聴覚障害児の教育を主とする特別支援学校）での授業が、効果的に行われるための方策について探りました。

【研究の背景】

聴覚障害児の教育を主とする特別支援学校（以下「聾学校」）では、近年以下のような様々な変化のもとで、これまで培ってきた授業の専門性の継承・発展と新しい専門性への取り組みが大きな課題となっています。

- ① 在籍児の減少、あるいは多様化
- ② コミュニケーション手段の多様化
- ③ 学力・言語力向上に対する保護者等の強い期待
- ④ 専門性の維持・継承・発展に関する課題、等

本研究では上述するような現状の把握と共に、様々な角度から“多様性の中で機能する聾学校の授業づくり”について検討しました。

【結果の一部】

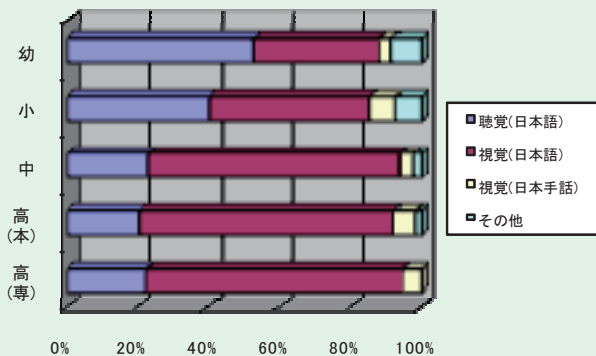


図2. 授業グループの中心コミュニケーション手段

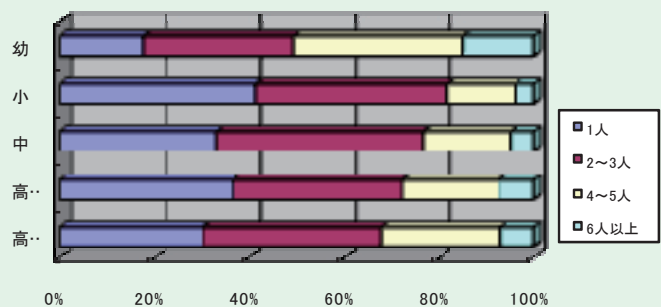


図1. 授業グループの人数

授業の実態把握のための調査からは、国語の授業がきわめて少人数のグループで行われていることや、学年が上がるにつれて視覚的手段中心の授業グループが多くなっていることなどが分かりました。また少数ではありますが日本手話を主要なコミュニケーション手段とする国語の授業グループも見られました。

また、本研究は数名の外部の研究協力者（聾学校教員）と共に進められ、それらの結果は実践研究として報告しました。そこでは学校全体で取り組む授業改善の試み、教員が使いやすい授業評価法の試作、授業改善のための職員研修や研究活動、話し合い活動を大切にした授業、等のテーマを設定し、上述のような様々な変化のもとにある聾学校の授業のこれからの在り方について探りました。また従来の聾教育が大切にし、これからも必要と思われる授業の専門性については、あらためて基礎・基本を確認するよう努めました。

【本研究の特徴】

本研究の特徴を上げると次のようになります。

- ① 近年の聾学校の授業をとりまく状況を調査で把握し、そこでの課題について聾学校の先生と共に実践研究を進めました。
- ② 聾学校での授業の基礎・基本を確認するとともに、新しい変化に対応する授業の専門性について探ってみました。

【本研究の活用】

本研究は次のように活用いただきたいと思います。

1. 聾学校の授業の実態を知る

本研究では全国の聾学校にアンケート調査を行い、国語（幼稚部では「朝の会」）の授業グループの実態を中心に、教科書の使用状況や授業研究会の進め方、授業改善に資する研修や授業評価のあり方などについてたずねました。これらのことから、聾学校の授業の現在を知っていただけると考えます。

2. 様々な変化に対応した授業の工夫について知る

本研究では新・転任者が多い中で授業の専門性を維持するために、様々な工夫をしている事例を紹介しています。また授業における手話の活用についても事例を紹介しています。さらに、小規模校で学校一体となって授業改善に取り組む事例なども、現在の聾学校の努力を表す事例と考えます。

3. 聾学校の授業の基礎・基本について知る

本研究では、あらためて聾学校で受け継がれてきた授業の工夫を記述しました。これらは新・転任の先生方にとって、簡単な授業マニュアルになることも考慮してみました。

【関連情報】

本研究に先立つ平成16年度から19年度の研究として、以下の二つの報告書が発行されています。これらには手話を活用した授業の事例が掲載されていますので、合わせてお読みいただければ幸いです。

研究成果報告書（平成16年度～平成17年度）

聾学校におけるコミュニケーション手段に関する研究－教職員の手話活用能力の向上とこれを用いた指導のあり方の検討－ 2006年発行

研究成果報告書（平成18年度～19年度）

聾学校におけるコミュニケーション手段に関する研究－手話を用いた指導法と教材の検討を中心に－ 2008年発行



本リーフレットは、研究所で行った次の研究を基に作成しています。

【研究課題名（研究期間）】

専門研究B「聾学校における授業とその評価に関する研究－手話活用を含めた指導法の改善と言語力・学力の向上を目指して－」
(平成20年度～平成21年度)

【研究組織／問い合わせ先】

研究代表者：小田侯朗
e-mail oda@nise.go.jp

研究分担者：原田公人
藤本裕人
横尾 俊